

高校2年

「平和を学ぶ——沖縄から世界を考える」

山田 孝・高 須 明・矢 木 修
鈴木 一 悠・斉 藤 真 子・仲 田 恵 子
川合 勇 治・加 藤 容 子

1. 学年テーマについて

高校生活も一年終え、学校生活に慣れてきた高校二年生を対象にして、「自分の人生を自覚的に選択する力」とは何かと考えた時、そのいわゆる「自覚的に選択する力」として教科の「学力」を考えるが、それと同時に「選択する力」の背景となる社会を認識する能力を豊かにすることが大切であると言えるのではないだろうか。自分の人生を選択すると言うことは、自己と他、例えば身の回りの社会との交渉の中で自覚的に選択されていくものである。では、現在の高校生が自分の人生をとれだけ自覚的に選択できるかという点、その選択の基礎となるべき知識や体験または、社会との交渉という面は、かなり希薄な状況になっているのではないだろうか。そういう意味で、学校教育の中で生徒自身が社会と積極的に関係を持ち、その中から学んでいく学習活動が重要である。こうした点からも、本年度より始まった総合人間科の取り組みが重要な意味を持つのである。

本校では、従来より教科の学習以外にも学校行事を軸にしながらい生徒自身による自覚的な学習活動を展開してきた。高校一年では、野外学習として「環境と福祉」というテーマで、グループ別で実地体験としての調査活動を行うフィールドワークを実施してきた。さらに、高校二年生では、平和学習の一環としての沖縄研究旅行があり、ここでもグループによるフィールドワークがおこなわれている。フィールドワーク自体が生徒自らが学ぶ内容を検討し、学ぶ内容に合致した訪問先を決めて、実際に現地を訪れて調査するものである。実際に人に会って学ぶという行為が、このフィールドワークには必要である。

この総合人間科の授業においても、この沖縄学習・フィールドワークを軸として生徒と社会の結びつきを深め、平和を学ぶ中から、「人生を自覚的に選択できる力」を養っていくこととした。社会との結びつきを「平和を学ぶ」中から考え、その「平和」も沖縄という一つの軸を通して、身近なものとして考えられるよ

うにこの総合人間科の授業の中で取り組んでいく。

さらに、「学習の遅れがちな生徒」のとらえかたについても、ただ単に教科の学習の「遅れ」だけでなく、たとえば、先に述べたような「社会」との結びつきの弱さも考えられる。教科の学習には少なくとも興味があるが、社会の動きには興味関心がない。また、他人には積極的に働きかけられなかったり、自分の考えを思うように伝えられない。他人のために何かしようと努力しようとか、生徒会の役員やクラスの係りに積極的に参加しないような傾向が見られる。こうした傾向の生徒も「遅れがちな生徒」と考えられるのではないだろうか。このほかにも、与えられたことはするが、それ以外は、積極的に取り組もうとしない、自ら学ぶ目的を持っていない生徒も「遅れがち」の範疇に含まれるのではないだろうか。こうした意味からも、自ら学ぶことを中心においた総合人間科の授業の意味が重要になってくるのではないだろうか。生徒自らが学び、発見し、社会にも積極的に関わっていく内容として、さらに学校行事を積極的に授業の中に取り込んでいくという点からも沖縄研究旅行を授業の中心にすえて行っていくことを学年の重要なテーマとした。沖縄は生徒にとっても魅力的であり、沖縄から現代の日本や世界の問題を考えることにより、「平和と自分」、「社会と自分」が身近になり、そこから社会を深く考えることが「自覚的に選択する力」になり、「遅れがちな生徒」にも、自ら学ぶ喜びを感じられるものになるであろう。

この総合人間科の授業の中では、教科の力だけでなく以下の力を伸ばしたいと考えている。

- ①生徒自ら調査・研究する力
- ②発表・討論する力
- ③まとめ・伝達する力

こうした力を伸ばすために、以下に述べる学習指導方法と教員の指導体制を確立していった。

2. 学習方法と指導体制について

学習方法として、まずは沖縄学習の指導として、

「国際理解・文化」、「人権・産業」「環境・平和」という三つのテーマ学習から沖縄に対する理解を深めていくことにした。沖縄というと「観光の島」という一般的なイメージが中心なので、これをどのように打破していくのか、この導入によってこれ以後の沖縄学習に対する意欲が異なってくるので、できるだけ多様な資料や教材を用いて授業を行うことにした。三つのテーマを、各クラステーマごとに学習して三回の講義で終了した。この三回の講義については、教員のチームによる教室での講義という形になったが、この講義の後には、生徒自らが沖縄について調査し学ぶ、グループの研究テーマと個人研究テーマの検討に入った。そして、沖縄研究旅行におけるフィールドワークの実施。実施後の研究発表、報告書の作成、さらに高校一年生への報告までが生徒の学習内容である。

また、生徒の自主的な組織として旅行委員会がある。沖縄研究旅行では、この旅行委員会が細部を検討して、実施に当たってのイニシアティブを発揮している。旅行委員会の役割を紹介すると

①生徒主体による旅行委員会

- ・事前学習プリントの作成
- ・保護者への研究旅行説明会の運営

10月21日 (土) 実施

②グループテーマ・個人テーマの検討

- ・グループテーマ、個人テーマの事前チェック
- ・テーマに問題があれば、再検討を命じる

さらに、研究グループである班の役割について

①研究旅行中の生活行動を共にする

②共に研究する

③フィールドワークの行程を考える

- ・訪問先を検討して、実際に連絡をとり、確認する

基本的に今回の総合人間科では、クラスを解体せずにクラス単位でグループを形成して、グループでまず「学び合う」人間関係をつくる。さらに個人の研究テーマを決めて自らが主体的に学ぶ内容を決定することとした。総合人間科のねらいである、生徒自らが学ぶことを中心にして、班によるテーマの検討。それから個人の研究テーマの検討と実際の調査。

教師の指導体制としては、高校二年の教員によるチームをつくり、このチームで三つのテーマをそれぞれ担当して、講義を行った。この講義の後には、各クラスの担当・副担当が指導教官として各グループの援助にあたった。教師も自分の専門を活かし、また、他の教科との連携もはかりながらグループや個人の指導にあたった。

今年度の高校二年の担任団の構成は以下の通りである。

- A組 山田(社会科) 齊藤(国語科)
 B組 仲田(英語科) 鈴木_(理科) 矢木(数学科)
 C組 川合(体育科) 加藤(養護) 高須(理科)

3. 指導過程

(1) 一学期の実践

まずはじめに、総合人間科の授業について学年全体でオリエンテーションを行い、一年間取り組む意義と目標を確認した。

4月15日 総合人間科オリエンテーション

以下の文章は、総合人間科のオリエンテーションで生徒に配布した資料の一部である。

1. 総合人間科とは

総合人間科とは、本校が文部省の研究開発学校に指定され、特別に設置された新しい教科です。この教科のなかで、私たちの「学ぶ」という力を高めていくことを目的としています。では、この総合人間科という教科のなかで何を「学ぶ」のでしょうか。今日の日本の社会から考えてみましょう。急速な円高と経済の不振、「リストラ」による会社社会の変化、学校現場では「いじめ」の社会現象化など、このように揺れ動く社会のなかで、「自分の生き方」・「将来についての夢」を確立し実現することがとても困難になってきているのではないのでしょうか。

また、皆さんは、高校生活も二年目を迎えようとしています。この高校生活のなかで、「自己」または「自分の未来」について真剣に考えてみたことがあるのでしょうか。「自己」・「自分の未来」から、なぜ高校で勉強するのかを考えてみたことがあるのでしょうか。高校での勉強が、本当に自分の将来に関係があるのかどうなのか。高校で学ぶ意義はあるのか。こうした問いかけに少しでも答えようと、教科の枠を越えて、創られたのが総合人間科です。総合人間科では、既存の教科では実現困難な、自ら調査・研究する活動を中心においていきます。また、内容的にも総合的な＝国語や社会や理科や英語や保健体育・養護などの＝内容を網羅していきます。また、教室から出て調査・研究を行ったり、講師の方を呼んで講演を行なう事も考えています。実際に、沖縄の研究旅行ではフィールドワークもあります。皆さんもどうしたら主体的に取り組めるかを考えてみてください。(以下、省略)

オリエンテーションで以上の点を確認して、沖縄学習の事前の学習として、教官チームによる三つのテーマでの講義を行った。

5月6日

クラス別教官チームによる講義・事前指導①

A組：人権 B組：国際理解 C組：平和
5月20日

クラス別教官チームによる講義・事前指導②

A組：平和 B組：人権 C組：国際理解
6月3日

クラス別教官チームによる講義・事前指導③

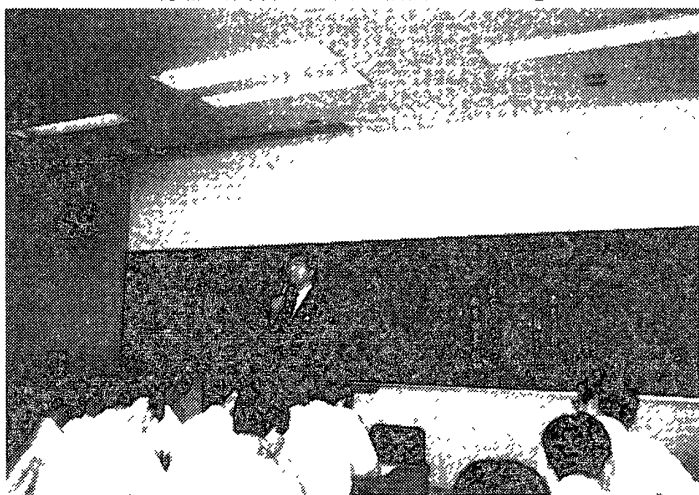
A組：国際理解 B組：人権 C組：平和

「人権・産業」のテーマでは、沖縄の基地問題から「人権問題」についてアプローチし、講義の内容としては、アメリカ兵が沖縄で引き起こした事件を題材にした歌を聴いて基地の存在について考えることができた。産業については、あまり堅苦しく考えるのではなく、沖縄独特の食生活から沖縄の人々の生活を理解できるように工夫を凝らして講義が行われた。

「国際理解・文化」では、戦争が起きるひとつの背景となっている他の文化を理解するという点から話がすすめられた。そして、国際理解が異文化理解という観点から「文化」について講義が行われた。教材としては、北嘉富子著「白旗の少女」と安里要江著「沖縄戦ある母の記録」という文献が利用され、生徒による読解が行われた。

「平和・環境」では、沖縄戦の実態を伝えるため、一時間をかけて沖縄戦の記録映画のビデオを鑑賞した。また、構造的な暴力の存在を持って平和的ではないという観点から、一つの構造的暴力である環境破壊を今日の沖縄からとらえる学習を行った。

6月17日 教育学部における植田先生の講義
「総合人間科での調査活動のために」



総合人間科の授業を進める中で、教育学部との共同研究も行われるようになり、植田先生を招いて、高校二年の担任団と総合人間科の授業についての検討が行われた。この共同研究により、生徒のフィールドワークにおける研究テーマの設定にあたり、植田先生のフィールドワークの実践からアドバイスをいただき、生徒全体に対する特別講義を実施することになった。

特別講義は、教育学部の大講義堂で行われ、生徒自身が研究テーマの決定にあたっての大切な動機付となった。また、担任団としても、植田先生の講義の中にあつた「学ぶことから学ぶ」という考え方を新しく生徒の指導方針の中に加えることにした。生徒がフィールドワークを通じて学ぶという活動自体が「学ぶ」ということであつた。また、グループで学ぶと言うことで生徒が相互に働き合つて「学び合い」、共に成長していくということの確認ができた。

これ以降は、担任と副担任が自分のクラスのグループの指導に入り、グループの研究テーマ・個人の研究テーマの検討に対する助言を行っていった。研究テーマが決定すると、テーマにふさわしい訪問先の検討が行われた。実際に沖縄と連絡をとつて、訪問先との打ち合せも行つた。ここで、生徒の旅行委員会が、グループの研究テーマ・個人研究テーマについての検討を行い、不適切なテーマがあれば、改善を求めていった。また、沖縄についての事前学習のプリントを作成して、朝のショートタイムの時に実施して、沖縄学習に対する関心を高めていった。

7月1日 グループテーマ・個人テーマの検討①
指導教官によるアドバイス

7月15日 グループテーマ・個人テーマの検討②
指導教官によるアドバイス

(2) 二学期の実践 ディベートによる沖縄学習の前進
二学期も引き続き、研究テーマの検討が行われたが、ディベートの授業を実施することにより沖縄学習がより深く理解されるようになった。ディベートの論題を「沖縄の米軍基地は撤廃するべきである」として、この論題に対して「肯定側」「否定側」かに分かれて論議を行った。また、本校研究協議会においてもこのディベートの授業が公開授業としておこなわれた。

9月16日 グループテーマ・個人テーマの検討③
指導教官によるアドバイス

9月30日 沖縄学習についてのディベート準備

10月7日 第一回ディベート授業実施

10月26日 第二回ディベート授業実施

11月2日 研究協議会 ディベートの公開授業

11月15日～17日 沖縄研究旅行

11月20日 研究旅行 各クラスでの研究成果発表会

12月7日 高校二年全体で研究成果発表会

12月16日 個人研究テーマ発表会準備

研究旅行実施後は、沖縄で学んだ内容をグループでまとめる報告集づくりの作業と個人研究テーマの報告集づくりを行った。

(3) 三学期の実践

まとめることから発表し伝達する力へ

1月20日より、個人の研究内容の発表が始まる。生徒自身による自分の研究内容の発表から、高校二年の代表として高校一年生に沖縄の研究旅行を伝達する報告会を実施する。

4. 生徒の取り組み状況と変容

(1) フィールドワークで「学び合い」を沖縄で実地体験
フィールドワークのよさは、実際に現地に行って調査することにある。四月から教員チームによる事前の講義から、グループワークの取り組みまで事前の学習を積んでの沖縄の研究旅行である。

四月に実施した、三つのテーマ「人権・産業」、「国際理解・文化」、「平和・環境」の講義は、あまり生徒には好評ではなかった。これは、総合人間科の授業が「生徒の主体的な取り組み」であると言っていたにも関わらず、はじめは講義形式にあったためである。しだいに、グループ学習、個人研究テーマの追求ということで、興味関心が高まってきたが、一方で研究はい

やだという感覚も存在した。それが最後には、研究旅行が有意義なものになったのは、沖縄の魅力であり、フィールドワークの取り組みであったのではないだろうか。

実際の沖縄での学習はかなりの強行軍である。那覇空港に着いて、そのままバスに乗って、アプチラガマに行って平和セレモニー。さらに、一日目の午後には、沖縄戦の体験者の安里要江さんの講演を聞き、その後でまたグループワークの打ち合わせ。こうした濃密な日程の中でも、沖縄から帰ってきた生徒の感想文を読むと、「観光地ばかりの沖縄ではなく、沖縄戦や平和の問題について考えられた研究旅行はよかった」、「お金を出していく沖縄旅行が、平和学習中心でいやな感じがしたけど、実際に行ってみると、来年の生徒にも私たちが見てきた沖縄をみてもらいたい」、「沖縄というとパイナップルやサンゴの鳥と思っていたけど、もっと奥の深い問題があることがわかった」などの感想が多く見られた。研究旅行後に実施したアンケート結果を見ても充実した沖縄研究旅行であったことがわかる。

● 研究旅行のアンケート結果の抜粋 研究収録より

沖縄研究旅行アンケート集計結果

沖縄研究旅行についてのアンケートを行なった結果をまとめてみました。

(1) 事前学習について

① 『観光コースでない沖縄』を読みましたか。

読んだ	39人	あまり読まなかった	64人
よく読んだ		4人	

② 事前学習プリントによく取り組みましたか？

よく取り組んだ	23人	取り組んだ	56人	あまり取り組まなかった	28人
---------	-----	-------	-----	-------------	-----

③ あなたは研究テーマ別（係別）事前学習に協力しましたか？

よく協力した	17人	協力した	56人	あまり協力しなかった	33人
--------	-----	------	-----	------------	-----

④ 「沖縄の米軍基地は撤退すべきである」の論題でディベートに取り組んだことは役に立ちましたか？

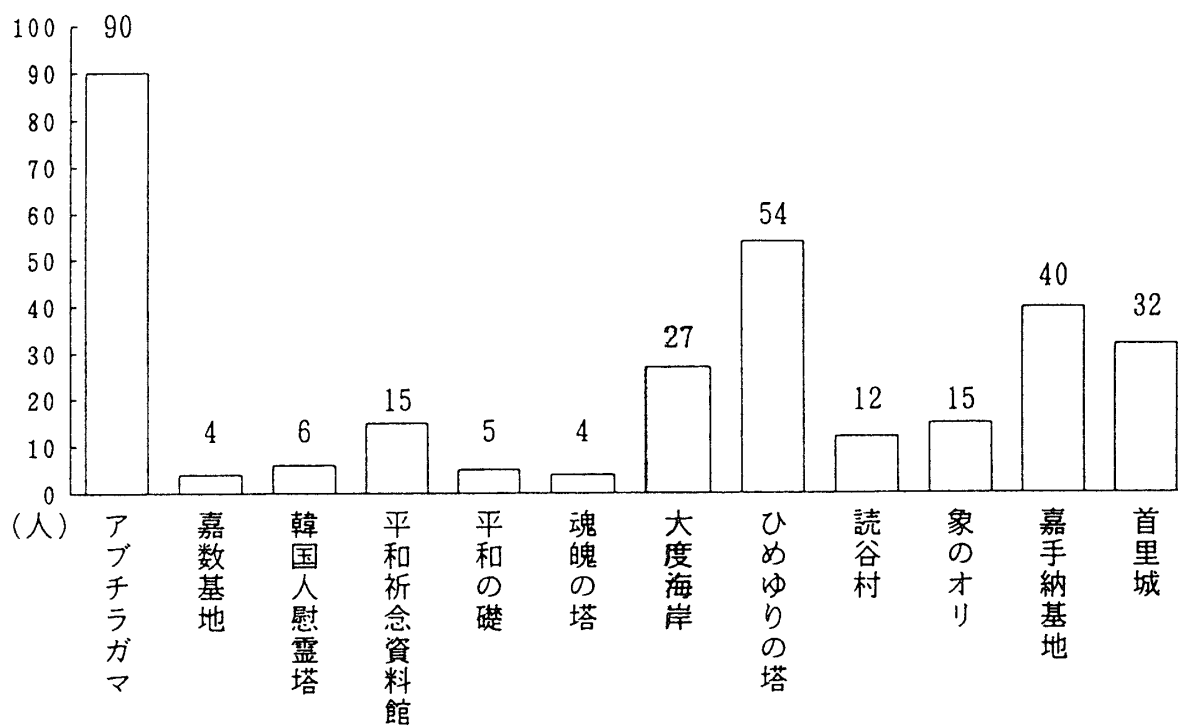
大いに役立った 34人	役立った 53人	あまり役立たなかった 26人
-------------	----------	----------------

(2) 沖縄訪問地について

① アフチラガマ

とても印象に残った 83人	印象に残った 18人	あまり印象に残らなかった 7人
---------------	------------	-----------------

⑤ 今回の訪問地の中で最も印象に残っている場所を3つ選んで記号に○をつけてください。



沖縄研究旅行・班テーマ・訪問先一覧

班	テーマ	行程(午前)	行程(午後)
A-1	沖縄の伝統工芸を体験	9:30 琉球ガラス村	13:00 琉球村(体験講座に参加) 沖縄県奥納村山田1130
A-2	産業からぞく沖縄	9:00 税関港湾合同課庁舎 3F 10:30 県庁 泉崎1-2-2 企画開発部企画調整課県庁 7F 農林水産部農政経済課県庁 9F	13:00 北部地区パイナップル協議会 国頭郡名護市伊差川267-1
A-3	南国の文化	10:30 名護市役所農政畜産課マンゴー パパイア アセロラを調査	13:00 沖縄フルーツランド パイン園 名護市字為又原1220-71
A-4	琉球幸福論	8:45 農連市場 10:30 民族資料館	13:00 名護農協 名護市宮里4-6-37
A-5	沖縄の伝統と文化	8:30~13:00 沖縄大学 宇井純研究室 助手の後藤さん	琉球村 沖縄県奥納村山田1130
A-6	沖縄戦ー日本とアメリカを比較してー	9:00 航空自衛隊那覇基地 那覇市字当間301 10:40 嘉手納飛行場周辺	13:00 読谷村役場 知花さんの話を聞く

班	テーマ	行程(午前)	行程(午後)
B-1	沖縄の中の AMERICA	11:00~ 異文化交流センターに集合 宣野湾市長田76-5 宣野湾市キャンプフォスター基地	昼食を基地内働くアメリカ人から話を伺う 13:30ごろから懇談と見学
B-2	皇民化教育と人権	9:30~10:30 沖縄国際大学 安仁屋先生	13:00 沖縄子どもの国沖縄市内
B-3	海から見た 沖縄の環境破壊	8:30~13:00 沖縄大学 宇井純研究室 助手の後藤さん 奥納村で解散	14:00~ 沖縄フルーツランド 名護市字為又原1220-71
B-4	今も残る基地 消えない過去	8:30 県道58合戦を北上 10:00 嘉手納町役場 仲村さんのお話	11:15~12:15 沖縄市 「反戦地主の会」の説明安里さん
B-5	食事と6つのWと 1つのH	9:30 県庁商業貿易課 11:00 農連市場	13:30~14:30 いんぶビーチ 14:45~15:30 パイン園

高校2年 「平和を学ぶ——沖縄から世界を考える」

班	テ ー マ	行 程 (午 前)	行 程 (午 後)
B-6	沖縄の生活文化	9:00-10:30 沖縄物産センター 那覇市久茂地3-10-1 10:00~11:00 つほ屋周辺	11:00~12:00 ゆうなんぎパスティス高良 12:30~13:30 沖縄県立博物館

班	テ ー マ	行 程 (午 前)	行 程 (午 後)
C-1	沖縄の伝統舞踊と祭り	9:00 県立博物館 那覇市首里大中1-1	13:00~14:00 玉城秀子琉舞 道場 那覇市楚辺2-8-6 15:00 万座ビーチ
C-2	海洋汚染と 沖縄のサンゴ	8:30~11:00 沖縄大学 宇井純研究室 助手の後藤さん 奥納村で解散	13:00~ 玉泉洞 13:30 知念海洋レジャーセンター
C-3	沖縄農業の 今と昔の変化	8:40 農連市場 10:00 沖縄黒糖(株) 読谷村字座喜味 10:30 琉球村	13:00 名護農協
C-4	沖縄決戦	南部戦跡をまわる	13:00 読谷村役場 知化さんの話を聞く
C-5	基地されと基地	8:30~10:30 旧海軍司令部塚 12:00 幸地門中墓 糸満市役所	14:00 金武町役場「実弾演習」 金武町字金武一番地
C-6	沖縄の人々の食文化	9:30~ 沖縄県水産課改良普及所 糸満市西崎1-3-2 講師 金城宏氏「沖縄の魚と魚食文化」 11:00~11:50 お魚センター	13:00 牧志公設

(2) ディベートによる沖縄学習について

総合人間科の授業の一環として、ディベートによる沖縄学習をすすめてきた。

これは、一つには「発表・討論する力」高めることを目標とし、さらに「基地問題」を中心にしながら、多面的な物の見方があること。さらに「基地」についての問題が現実存在することを改めて考えさせる場にもなった。

さらに、実際に「肯定側」・「否定側」にわかれて準備を重ねると、かなり沖縄について調べないと討論できないことがわかってきた。一回目のディベートの授業と二回目を比べるとかなりの進歩がみられたが、それは事前の学習の深まりによるものだった。生徒たちも「ディベートに勝つ」という目的で自発的に資料にあたり調査して、論拠を固めることができた。最初は、このディベートの授業にのって来るか不安であったが、一回目の授業の準備段階である役割分担でも、「否定側」は希望する班が複数あり、どの班がやるのか困ったほどであった。さらに、見ていた判定員の側からも、「討論に参加するほうがおもしろい」という意見がだされ、当初は一回だけであったディベートの授業も、急遽二回目の授業を実施することにした。

このディベートの授業により、沖縄＝基地問題について意識が深まったようだ。「肯定側」は、いかに基地が問題のあるものかを発表し、一方「否定側」に不利な立場から自分たちの「論拠」を構築していった。

あくまでも「ゲーム」ということを強調しながら行ったのだが、実際にはこの基地問題現実の問題としてデリケートな問題を含んでいる。米軍基地の問題は、様々な立場がある。このディベートを取り組むなかで、自分が「否定側」＝「米軍基地の撤廃に反対」という立場だから、自分の考えを基地の廃止には反対という立場に変えた生徒が存在することである。たとえ少数であっても、ディベートにより自分の考えを変えてしまったのは残念なことである。沖縄に研究旅行にいく私たちとしては、もっと沖縄で暮らす人々の立場に立って考える必要があるだろう。

ディベート学習についての後日談だが、ディベートの討論の中で「米軍の基地は撤廃するべきである」にたいして、「否定側」の立場に立ち「肯定側」をやりこめていたグループが実際に沖縄に行って現地の人と話をするなかで、自分たちの展開していた理論がいかに間違っていたか痛感して帰ってきた。彼らはけっして、米軍基地を肯定していたわけではなかったのだが、改めて沖縄に行ってみて自分たちの立てた論理が間違っていたことに気づいたようであった。このディベートによる沖縄学習については、後述するのでここでは資料は割愛する。

5. 今後の課題

(1) 自ら働きかける力を高める。

総合人間科の授業の中で、沖縄学習を軸として「自分の人生を自覚的に選択できる力」の形成に向けて取り組んできた。実際に、研究旅行で沖縄を訪問して、フィールドワークの中で多くの人に出会い、社会との密接な関係を自覚できるようになってきた。沖縄の基地問題に関連して社会の問題、平和問題や環境問題にも関心を持った生徒も増えてきたようである。自ら学ぶ課題を見つけだして、個人研究テーマに取り組めた生徒も多かった。こうした成果を研究集録としてまとめることもできた。しかし、この次は、この学んだ内容が生徒の実際の生活の場面でどのように発揮されるのか興味のあるところである。学んだ内容を糧として、今度は実際に社会に対してどのように働きかけていくのか、また、働きかけるのかが問われてくるだろう。

(2) 評価をめぐる

生徒の変化、成長をどのように評価するのか問題である。生徒の率直な感想の中には、「結局、総合人間科と言っても、作文のうまいものが評価が高いのではないか」と言う声があった。授業の終りに毎回感想文を書かせていたので、その感想文が評価につながると考えての「声」であった。こうした意見もあったので、総合人間科の授業については、今までの教科の授業にはない、新しい評価、生徒自らの学習を自分たちで評価するという自己評価と相互評価を取り入れることになった。具体的には、個人研究の発表を通じて、自分の研究について、自己評価を行い、その発表について、クラス内で相互評価するものである。

全体の評価としては、A B Cの三段階として、良くできたこと、成長した点をプラス評価することになった。

しかし、評価方法については、もっと早い時期に公表しておけば、もっと生徒のやる気を引き出したのではないだろうか。この点も来年への課題と言える。

(3) カリキュラム化の課題

沖縄の研究旅行も今年度で6回目となった。総合人間科の授業で沖縄学習を取り上げたのだが、今までである平和学習と沖縄学習をどのように体系的な取り組みにしていくのか、カリキュラム化する必要がある。今年度は、総合人間科も初年度ということで、授業をやる中で、内容も考えるという場面も多く、指導も不十分であった。ディベートの授業も、急きょ2回目を実施するなど、手さぐりの状況であった。こうした小回り

のきくのも総合人間科の良さでもあるのだが、次年度に向けて、一年間のカリキュラムを作成することが必要である。先を見とおせる授業にしていくためにも、カリキュラム化が必要である。

さらに、カリキュラムを作成するにあたっては、生徒の意向も反映できれば、生徒自身の取り組み方も積極的になるのではないだろうか。

6. 事後アンケートから

自分自身の総合人間科への一年間の取り組みを振り返りながら、事後アンケートに答えた結果と、感想文にかかれた内容とは対照的であった。

アンケートでは全体的に(1)調査する力(2)研究する力(3)発表する力(4)討論する力、がつき、(1)さまざまなものと学びあえたこと(2)自分自身でテーマを考え選び、調査研究し、まとめ発表したことがよかった点である、とし(1)フィールドワーク(2)ディベート「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」は来年度の高二でも取り組んだらよいと思うという、総合人間科への肯定的傾向がある。

一方 感想文では、自分たちの総合人間科への取り組みの姿勢をきびしく反省したものが多い。また自分たちを取り巻く社会や現実を目を向けて、総合人間科の時間数や内容に意見と疑問を述べるものもいた。積極的な取り組みをした生徒にそのような傾向がみられる。

総合人間科では、ディベートや個人研究などの評価の中心を自己評価と生徒同士の相互評価においた。それらの結果は、そのつと、生徒全体に返しながらすすんだが、総合的にみて、妥当な評価であったといえる。感想文にみられる多様で、きびしい、さまざまな総合人間科への意見は、このような取り組みと関連があるのたろう。

そして、一人ひとりの取り組みの姿勢や準備の過程での生徒同士の協力と学び合いに加えて、最終的に全員の評価用紙を一人ひとりへ返却し、確認することが、総合人間科で「学び合うこと」であった。

(1) 事後アンケート（数字は実数 生徒数は112名）と感想文から

1. 総合人間科で学ぶことによって、どんな力がついたか。

- 55人 (1)調査する力
- 47人 (2)研究する力
- 44人 (3)発表する力
- 41人 (4)討論する力
- 39人 (5)友達と協力して取り組む力
- 35人 (6)まとめる力

- 23人 (7)話を聞く力
- 12人 (8)伝達する力
- 3人 (9)その他（考える・知識・いろいろな力）

2. 教科の授業と比べて、総合人間科の授業の形態のどういう点がよかったか。

- 63人 (1)さまざまなものと学びあえたこと（対象はクラスメート・先生・フィールドワーク訪問地の方・役所・大学・資料・ビデオ・組織・社会・自然・歴史など）
- 61人 (2)自分自身でテーマを考え選び、調査研究し、まとめ発表したこと
- 52人 (3)高2の研究旅行地が沖縄であったこと
- 43人 (4)ディベート・発表などで自己評価・相互評価をしたこと
- 34人 (5)班での話し合いをもとに、お互いに協力しながら発表をしたこと
- 33人 (6)自分自身が学ぶ主体であったこと
- 4人 (7)その他（いろいろなことを知ったこと）

3. 来年度の高二でも取り組んだらよいと思うもの

- 74人 (1)班でのタクシーによるフィールドワーク
- 73人 (2)ディベート「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」
- 30人 (3)個人テーマを各自が決めて個人研究する
- 26人 (4)個人研究の発表会
- 25人 (5)研究集録のまとめ
- 22人 (6)教育部植田先生の話「学ぶことから学ぶ」フィールドワーク調査について
- 21人 (7)班ごとの研究発表会
- 15人 (8)TT（教員チーム）による授業（国際理解文化・基地人権産業・環境戦争平和）
- 12人 (9)事前学習（「観光コースでない沖縄」）プリントによる沖縄学習
- 11人 (10)高一への研究旅行報告会

(2) 感想文から

- ① いつもの授業の時、予習などをしていても私たちは受け身になってしまいます。この総合人間科では、受け身ではなく自ら進んで自発的に動き、調べることが出来るようになったと思います。まだ自分で選択するとい

う勇氣はないけれど少しずつ自分で考え選ぶことの判断ができるようになると思います。この総合人間科では、その準備段階の一つとして大切なものとなった気がします。これからゆっくりと、でも自分にとって大切なものを選ぶ、選択眼をきたえていきたいと思います。(Fさん)

② 総合人間科に取り組んだことで、少し心が豊かになった気がします。それに社会問題について関心を持つようになりました。前者についてはどこの学校でも受験だと言われたり詰め込み教育なのに対して名大附はこういう科目をやったことでみんな協力的だったし意欲的だったと思う。また後者については、米軍の暴行事件を発端にした基地問題についてのディベートが、意欲的に取り組めニュースをみる機会も増えた。だから社会問題にもかなり精通していたように思う。今の社会には改善すべき点があると思う。その中で教育面では偏差値問題などだ。受験のため、就職のために勉強するという点だ。本当の勉強とはそんなものじゃないと思う。こんな勉強だから勉強嫌いの人がでてくるのだと思う。これからもっと多くの学校でこの教育が取り組まれていけばいいと思う。(Kさん)

③ 私は初めから「総合人間科」でやることに少し興味を持っていました。自分で自主的に物事に取り組んだりみんなと話し合っ協力し合っ研究したり、私は総合人間科は必要だと思います。たくさんの知識が自分のものにできるし、自主性も身につけられる。私は、あまりみんなの前で発表したり中心の人の一人としてやったりすることが苦手なので、今まで自ら進んでやったりすることはあまりありませんでした。しかし沖縄のディベートや個人研究発表など、そういう場が与えられ誰が中心人物でやるかとか関係なく一人一人が主人公となって意見を言ったり物事をやっていったりして、自分から進んでどんどんやっていく力がつくと思いました。(Yさん)

④ ディベートでは、客観的に物を見ること、相手を納得させる話し方、意見の述べ方が大事だ。そして班全員で協力し、しかも自分の意見を出しあい一つにまとまっていけたことに喜びを感じた。ディベートは協調性と自分の意志を確実にもつ力をつけてくれるものだ。この二つの力はこれからの社会にとっても大切なことだと思う。個人研究と発表では普段いくこともないだろう図書館へ行き、関連図書を調べるといった貴重な体験をしたし、集録ではそれら調べたもの

をまとめるという能力を完全に習得したわけではないが、今後の参考にはなるだろうと思う。こういう将来人間性を確立していくために必要な力をつけられるのも、総合人間科の授業があったからだと思う。(Yくん)

⑤ 総合人間科の授業はよい所と悪い所がはっきりしていた。事前学習とフィールドワークと同じプリントが何回も配られたり、参加意識の高い子と低い子がいたり、先生の位置があやふやで生徒のみで動こうにも動けないと感じた時もあった。せっかく二時間連続であるのだからディベートの下準備にかけることができたら、もっと内容の濃いディベートが出来たのに。時間配分と内容の精選をしっかりとやるべきである。先生の講義はいつも聞いているのだから、来年行う場合は、毎回生徒が考え、発表して、また考えるという内容のものにしてほしい。先生も話をするというならば、「同じ立場の意見」として参加してほしい。(Kさん)

⑥ 総合人間科で沖縄へ行き研究ができたこと、フィールドワークができたことはとてもいい経験だと思います。多くのひととふれあうことができたし貴重な話もいくつか聞くことができた。一年を通してみると自分が意欲的に取り組めばその分、実になって返ってくるものだけれど、何もしなければただ無駄に時間を費しているだけのものだと思う。それにいくら学校で「人間」について「文化」や「権利」について本質的なものを教えてもわからない人にははっきりいって何の効果もないと思う。いくら頭の中で理解しても行動がそれになっていかなければ、何のための総合人間科かということになってしまうと思う。将来これで学んだ知識を生かしたいと本気で考えている人、必要な人に選択科目としておいたならば、もっと内容も濃く充実したものになるしレベルも上がるんじゃないかと思う。(Mさん)